

マックス・ウェーバーとロシア(2)

——ロシアにおけるウェーバー——

小島 定

目次

- 1 はじめに
- 2 ウェーバーの著作のロシア語訳について
- 3 ウェーバーとロシアの同時代人
 - (1) ウェーバーのロシア革命論の反響
 - (2) ボグダン・キスチャコフスキーとウェーバー
 - (3) フョードル・ステプーンとウェーバー
 - (4) ロシア在住の学者とウェーバー
 - (5) ウェーバーの『ルースキエ・ヴェードモスチ』紙への公開書簡(1909年3月17/30日)
- 4 セルゲイ・ブルガーコフとウェーバー
 - (1) 「国民経済と宗教的人格」(1909)
 - (2) 『道標』論文「ヒロイズムと禁欲」(1909)(以上本誌第10巻3号)
- 5 1920年代のロシアのウェーバー研究
 - (1) ウェーバーの翻訳とロシアの西洋古代・中世史研究
 - (2) ペトルシェフスキーと「ブルジョア史学」攻撃の開始
 - (3) A・И・ネウスイーヒンのウェーバー研究(以上本号)
- 6 現代ロシアのウェーバー研究の動向(以下未完)

5 1920年代のロシアのウェーバー研究

- (1) ウェーバーの翻訳とロシアの西洋古代・中世史研究

既にわれわれは前稿でウェーバーの著作のロシア語訳を紹介したとき、ソヴ

ェト時代の1920年代の前半に、『都市論』(1923年)⁽¹⁾、『一般経済史』(1923年)⁽²⁾、『古代農業事情』(1925年)⁽³⁾、と立て続けに3本の翻訳が出ていることを確認した⁽⁴⁾。特徴的なことはまず第一に、ウェーバーの原論文の発表後非常に早い時期に翻訳がなされたことである。『都市論』の原論文 ≪Die Stadt≫は、よく知られているように、はじめ *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 47, 1920/21 に発表され、1922年刊行の *Wirtschaft und Gesellschaft*, (初版)に収録されたのだから、その翌年の出版ということになる⁽⁵⁾。『一般経済史』 ≪Wirtschaftsgeschichte≫に至っては、原本が刊行されたまさに同じ年の1923年であった。『古代農業事情』 ≪Agrarverhältnisse im Altertum≫の場合は、原論文は、*Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 3. Aufl. Bd. 1, 1909 に掲載されたものであるから、前二者とは多少事情は異なるが、しかしいずれにしても、これらの著作の外国語訳としてはおそらく最初のものではあるまいか⁽⁶⁾。しかし第二に、もっと興味深いのは、これらのウェーバーの三書の題材がいずれも主として西欧古代史および中世史に関わるものであり、したがってまたそのロシア語訳の責任編集者も西欧古代史ないし中世史を専門とする歴史学者であったという点である。『都市論』の編集者はニコライ・カレーエフ(Николай Иванович Кареев, 1850-1931)であり、『一般経済史』の責任編集者はイヴァン・グレフス(Иван Михайлович Гревс, 1860-1941)、『古代農業事情』の編集者はドミートリイ・モイセーヴィチ・ペトルシェフスキー(Дмитрий Моисеевич Петрушевский, 1863-1942)である。彼らはいずれも比較的良好な経歴の持ち主で、帝政期からすでに名を知られた研究者であった。思想的傾向から言えば自由主義的な見解の持ち主であったが、ソヴェト政権初期のアカデミズムの世界史教育を担い、少なくとも1920年代の前半まではその地位を保っていた。既に革命前から彼らの歴史研究のなかにウェーバーへの関心が生まれており、それが20年代前半期に上で述べたウェーバーの著作の翻訳刊行となってあらわれたのである。したがってソヴェト期のロシアではウェーバーの受容がまずもってロシアの西洋古代史、中世史研究のなかから始まった

ことを確認することができる。ここでは以下少し彼らの経歴を見ておくことにしよう。

『都市論』の編集者、ニコライ・カレーエフ(1850-1931)から始めよう。彼は1873年にモスクワ大学歴史哲学部を卒業した後、パリに留学して(1877-78)クーランジュ (Fustel de Coulange, 1830-1889)のもとで学んだといわれるが、フランス革命前夜の農業＝農民問題を研究した人物として知られている。1879年に発表された彼の修士論文『18世紀最後の4半世紀のフランスにおける農民および農民問題』《Крестьяне и крестьянский вопрос во Франции в последней четверти XVIII века.》はフランス農業＝農民史研究のパイオニア的研究として有名であり、この著作によって彼は、モスクワ大学を拠点にした中世イギリス農業史のヴィノグラードフ(Павел Гаврилович Виноградов, 1854-1925)、フランス農業史のルチツキー(Иван Васильевич Лучицкий, 1845-1918)、およびコヴァレフスキー(Максим Максимович Ковалевский, 1851-1916)らと並ぶ、いわゆる「ロシア歴史学派」の形成期、その「第一世代」に位置づけられている⁽⁷⁾。なおカレーエフの著書のフランス語訳⁽⁸⁾も出版されて、マルクス、エンゲルスの高い評価を受けたこともある⁽⁹⁾。一時ワルシャワ大学で(1879-1884)教鞭を執った後、ペテルブルク大学の教授となったが(1890-1899)、1899年の大学紛争で大学を追われ、その後ブロックハウス・エフロン百科事典の歴史部門の責任者となってその編集に携わった。1906年には大学に戻り、17年の革命までペテルブルクの歴史家協会のリーダーの一人であった。フランス農民史研究と並んで、25年間をかけて刊行した『近代西ヨーロッパ史』(全7巻、9冊本、1892-1917年)《История Западной Европы в новое время》T.1-7. в 9 кн., СПб., 1892-1917. という業績もある。彼の研究の特徴について言えば、ヴィノグラードフ、ルチツキーらは実証的な研究で世界的な名声を得ることになったが、カレーエフは次第に実証的な研究よりもむしろ歴史哲学の方向に傾斜していき、その結果は彼の博士論文『歴史哲学の基本問題』(全2巻、1883年刊行)《Основные вопросы философии истории》, T.1-2, М., 1883. となってあらわれた。彼の歴

史哲学はロシアのミハイロフスキーらの主観主義社会学派を継承して、いわば歴史学と社会学との総合を図るような「類型論」を目指すものであったといわれる⁽¹⁰⁾。また、政治思想の面から見れば、彼は自由主義者であって、1905年1月8-9日には、ロシアの流血を避けるためにヴィッテ、スヴァトポルク-ミールスキーと交渉する文化人の代表団に加わったこともある。そして、1905年革命期にはカデットに入党して、第一国会の議員の経験も持つ。その後政治から身を引いて学究生活に戻り、1917年10月のポリシェヴィキ革命に対しては、これをロシア史の「不可避的な出来事」として受け入れた。そして20年代前半には『フランス革命の歴史家たち』（全3巻、1924-1925）《Историки Французской революции》、в Т.1-3. を含めて歴史学や社会学に関するいくつかの論文を発表している。旧世代の歴史研究者として1929年にソ連邦科学アカデミーの名誉会員にも選ばれている。だが、すぐその後、他の自由主義的歴史学者と同じく1930年12月には「反マルクス主義的」見解の持ち主として断罪され、1931年2月に急死した⁽¹¹⁾。

カレーエフはこうした経歴の持ち主であったが、ウェーバー都市論へのみずからの直接的な関わりについては、彼自身が「翻訳編集者の序文」のなかで、次のように述べている。「20年前にペテルブルク総合技術高等学校で私は古代史の講義を行なった。この講義の内容はその後『古代世界の国家-都市』《Государство-город античного мира》という表題で出版された。その当時わたしにはこれに続いて中世都市、またその後に近代都市の講義もやろうという意欲が湧いてきた。これはそれによって後に、都市生活の歴史的発展について、また社会発展の様々な段階で都市が文化の一般的な発展に及ぼした影響について、いくらかの一般的な社会学的結論が引き出せるものと考えたからである。こうした目論見は結局実現できない運命であったのだが、しかしそれだけに、本書の翻訳の編集を依頼されたとき、わたしはこのマックス・ウェーバーの著作に人一倍大きな関心をもって引き受けたわけである」⁽¹²⁾。後の二人についても見るように、19世紀末から20世紀初頭にロシアで西欧古代・中世史の研究が西欧、

特にドイツの最新の諸研究を受容しながら大きく展開しつつあったことが窺われるが(この点はウェーバーの「古代文化没落論」〔Die sozialen Grunde des Untergangs der antiken Kultur, *Die Wahrheit*, Erstes Maiheft, 1896〕が、早くも1904年に、すぐ後で述べるペトルシェフスキーによって翻訳紹介されていることのなかにも見ることができる)、そうした文脈のなかで、かつ歴史学と社会学との総合を目指すような類型的方法への彼自身の志向もあって、ウェーバー都市論への関心がカレーエフに芽生えたことは容易に想像することができる。なお1920年代にはこの翻訳とともにウェーバー都市論に、当時新世代の中世史家として登場しつつあったネウスイーヒン(A.И. Неусыхин, 1898-1969)が正面から取り組んだことは、後論で触れられるであろう。

次に『一般経済史』翻訳の責任編集者はイヴァン・グレフス(Иван Михайлович Гревс, 1860-1941)であった。彼は1883年にペテルブルク大学歴史哲学部を卒業し、西欧古代史、とくにビザンチン史の大家であるヴァシーリエフスキー(Василий Григорьевич Васильевский, 1838-1899)に学んだが、学生時代には解体期の「人民の意志」派の学生サークルに所属した経験を持つ。その後自由主義に転換して解放同盟の機関誌『オスヴォジヂェーニエ(解放)』の編集にも関与し、1905年革命期にはカデット党员であり、ウェーバーもそのロシア論のなかで注目した自由職業団体「サユーズ・サユーズフ(諸同盟連合)」⁽¹³⁾、その形成期の団体の一つである「学者同盟」Академический союзの創立者の一人でもあった⁽¹⁴⁾。学者としての経歴について言えば、1890年からペテルブルク大学の中世史講座の私講師となり、1899年に主著となる『ローマ土地所有史概説(特に帝国時代の)』《*Очерки из истории римского землевладения(преимущественно во время империи)*》Т. 1, 1899.を發表している。1903年からは同大学の正教授になった。彼もまたカレーエフと同じくペテルブルク歴史家協会の世界史ゼミナールの中心的な人物であった。彼の古代・中世史研究の特徴は、文化や日常生活、道徳や心理など多様なファクターを強調するもので、文化史あるいは社会史と呼ぶうるものであった。17年革命後は1923年までペテルブル

ク大学で教壇に立ったが、民俗学(краеведение)の組織者としても活動した。彼もまた1930年に一時逮捕された経験を持つ。

なお、彼はウェーバーと密接な交流のあったキチャコーフスキーとも親しかったようで、キチャコーフスキーが1908年にドラホマーノフの政治論集をロシア国内でも刊行する事業を始めたとき⁽¹⁵⁾、その共同編集者に名を連ねている⁽¹⁶⁾。ドラホマーノフは、前稿でものべたように、ウェーバーがロシアの民族問題に関連して非常に注目していた人物であり、彼の著作集の国内出版にグレフスが関与していたことは、それはそれで興味深い事実であるが、さらにウェーバーとの関連について言えば、キスチャコーフスキーが、これも前稿で触れた1906年5月6日付のウェーバーへの手紙のなかで、グレフスが上記のローマ土地所有史の自著をウェーバーに送ると約束してくれたことを伝えている⁽¹⁷⁾。したがって、ウェーバーの方も、その程度はともかくとしてグレフスのことはよく知っていた⁽¹⁸⁾。とはいえ、グレフスが実際にどのような経緯で——原本の出版と同じ年に！——ウェーバーの『一般経済史』の翻訳に関与したのかは今の所われわれには詳しくは分からないが、ウェーバーの作品は通常の意味での狭い経済史ではなく、古代から中世そして近代に及ぶその視野の広さとともに文化的心理的ファクターと経済現象との関連を特に重視したものであったわけだから、同じく文化史的な手法をとるグレフスの関心を引いたことは容易に推測することができる。

(2) ペトルシェフスキーと「ブルジョア史学」攻撃の開始

カレーエフおよびグレフスに比べて、『古代農業事情』の編集者、ドミートリイ・モイセーヴィチ・ペトルシェフスキー(Дмитрий Моисеевич Петрушевский, 1863-1942)はロシアの史学史のなかでもより重要な位置を占める人物である。20年代末に出版された彼の一つの著書がきっかけになって「ブルジョワ史学」攻撃が大々的に開始されることになったという事実があるからである。そのみならず、われわれのテーマに照らしてみても、彼の位置ははるかに重要であ

る。というのは、彼のその著書が——リッケルトやドブシュと並んで——歴史学の方法論としてウェーバーの「理念型論」に高い評価を与えており、まさにそのことが理由とされて彼がマルクス主義史学の側からのイデオロギー攻撃の的になったという事情があるからである。われわれは、ここで、すなわちスターリン体制下のソヴェト・マルクス主義史学の確立期に、「ブルジョア史学」攻撃の一論点として「ウェーバー批判」があったという事実¹⁹⁾に遭遇するわけである。そしてさらに付け加えていえば、彼は20年代に貴重なウェーバー研究を残したニュースーヒンの直接の師でもあった。その意味では、ペトルシェフスキーは帝政期からソヴェト期へとロシアのウェーバー研究を橋渡しした人物であったということが出来るかもしれない。

チェルニーゴフ県生まれのペトルシェフスキーは、1886年にキエフ大学歴史哲学部を卒業したが、彼のキエフ時代の師が、「ロシア歴史学派」の第一世代に位置づけられ、フランス革命前の農業＝土地問題の古典的な研究で我が国でもよく知られているルチツキー(Иван Васильевич Лучицкий, 1845-1919)であった¹⁹⁾。ルチツキーの指導の下、彼の勧めでペトルシェフスキーは大学に残ってヨーロッパ中世史の研究者としての道を歩むことになった。その後、モスクワ、ワルシャワ(1902-1905)、ペテルブルクの各大学で勤務した後、1906年にモスクワ大学の世界史講座の教授となった。1911年に政府文部省の大学自治抑圧に抗議して多くの教授とともに辞任したが、1917年に大学に戻った。ボリシェヴィキ革命後も、彼はモスクワ大学の歴史学講座の指導的な教授であって、1924年に同大学の研究者養成部門を母体にして発足した「ロシア社会科学調査研究所連合」(Российская Ассоциация Научно-исследовательских Институтов Общественных Наук, 通称 РАНИОН)の「歴史研究所」の所長であった(1929年まで)²⁰⁾。この研究所には革命前からの自由主義的教授たちが蟄集し、それにマルクス主義者も加わり、20年代のソヴェト史学形成期における一つの中心を成していた。そして、ここから新世代の最良の学問的な専門研究者が育っていったのである。その多くはすでに師たちの見解とは異なり、史的唯物論の立場

¹⁹⁾ 補注(1)

を取るに至っていたが。ネウスイーヒンとともに、われわれのよく知っているイギリス中世農業史家コスミンスキーもまたペトルシェフスキーに教えを受けた一人であった。しかし、1928年末を転機にペトルシェフスキーは激しい「ブルジョア史学批判」にさらされ、29年に科学アカデミー会員に列せられはしたが、事実上その研究者生命を絶たれた。

さて、ざっとこうした経歴を持つペトルシェフスキーであるが、彼の研究者としての地位は、なんといっても世紀転換点に発表された『ワットタイラーの乱』（全2巻、1897-1901）《Восстание Уота Тайлера》、Ч.1-2, СПб.- М., 1897-1901.によって固まった⁽²¹⁾。これまでの大方の評価では、彼はイギリス中世農業史研究の分野におけるヴィノグラードフの「継承者」(А·И·ダニーロフ)⁽²²⁾、あるいは「ヴィノグラードフ学派の最大の代表者」(Е·А·コスミンスキー)⁽²³⁾とされている。コスミンスキーの整理に従えば、ヴィノグラードフ、ルチツキーらに次ぐ「ロシア歴史学派」の「第二世代」の代表者の一人ということになる⁽²⁴⁾。

彼は1894年以来1910年までは、毎年のように西欧を訪れて⁽²⁵⁾、イギリスの資料館で実証的な資料研究をつみ重ねるとともに、他方では、きわめて熱心に西欧における古代・中世史研究の新しい学説の吸収に努めた。このことも彼の研究スタイルの特徴の一つであった。われわれのテーマに関わる文脈からいっても、既に1904年の時点でウェーバーの「古代文化没落論」（原論文は1896年発表）の翻訳編集を行なったという事実は特筆すべき事柄である⁽²⁶⁾。彼がこのウェーバー論文からいかなる具体的な問題を読みとったかという点については、今のわれわれには詳しくは分からないが、ちょうどその頃彼はイギリス中世史研究とともに広く西ヨーロッパの封建制の起源の問題に関心を広げていったことが明らかになっているので（この問題を扱った『中世の社会と国家の歴史概要』が1907年に出版されている⁽²⁷⁾）、そうした関心から西欧の古代史論争を知り、この論争にかかわりをもつウェーバー論文の翻訳を思い立ったであろうことは容易に想像がつく⁽²⁸⁾。こうしたヨーロッパ封建制のゲネシスへの関心から、さらにまた彼を強く捉えていた歴史学の方法論的問題への強い関心⁽²⁹⁾か

ら、『国家学事典』に掲載されたウェーバーの『古代農業事情』(第二版)(1909年刊)にも彼の目が向いていったことは、われわれにも充分理解しうる事柄である。そして彼が責任編集者となったこの二つ目のウェーバーの著作の翻訳が1925年の時点で出版されたということは、ソヴェト時代の初期の歴史学界とりわけ西洋中世史研究の分野でのペトルシェフスキーの権威が引き続き高かったことを証明するものであろう。

新世代の中世史家、A・И・ダニーロフがかつて指摘した所によれば、1905年革命の破綻以後ペトルシェフスキーは深い学問上の「危機」を体験するが——ダニーロフは、これをヴィノグラードフ以来のロシア歴史学派＝古典的な「ブルジョア歴史学」の危機の現われだとみていた——、そこからの活路を、彼は新カント派、特にリッケルトの認識論とウェーバーの歴史社会学、とりわけ「理念型」論に——この理論概念は歴史学と社会学との総合を果たすものと、ペトルシェフスキーには考えられていた——、そしてまた、中世史の古典的理論に対するきびしい批判者として登場したアルフォンス・ドブシュ(Alfons Dopsch, 1868-1953)の新学説とに求めることになったという⁽³⁰⁾。

ペトルシェフスキーはソヴェト時代にも、自分はマルクス主義者ではなく、ウェーバーとドブシュの継承者であると公言し、終生その志操を守ったといわれている⁽³¹⁾。しかし、1920年代の中頃までは学問上のことであれば、そうした発言もそれほど咎められることなく許されたが、1928年になって社会的な雰囲気が一変した。ポクロフスキーを中心とするマルクス主義学派が、猛然と「ブルジョア史学」を批判するイデオロギー攻撃を開始したからである⁽³²⁾。これは、広く社会的な文脈から見れば、1928年3月のいわゆる「シャフティ事件」を契機にして始まったいわゆる「ブルジョア専門家」攻撃の一環と見ることもできる。歴史学の分野で最初の標的になったのが、ちょうどその年に刊行されたペトルシェフスキーの著書『中世ヨーロッパの経済史概説』(1928年)《*Очерки по экономической истории средневековой Европы*》М., 1928.であった。とくにその序文「現代歴史学の論理的諸問題」がやり玉に挙げられた。1928年

3月30日と4月6日にマルクス主義歴史家協会社会学セクションで、ペトルシェフスキーの著書をめぐる批判討論会が開かれ、彼の著書は「ソ連における反マルクス主義的歴史学派のマニフェスト」であると弾劾された⁽³³⁾。その場で大きく取り上げられた論点の一つが、——リッケルトの文化科学の方法と自然科学の方法の二分化論(個性化的方法と普遍化的方法)の限界を克服しようとした——ウェーバーの「理念型」概念の問題であった。ペトルシェフスキーはウェーバーの「理念型」概念を歴史学の方法論として積極的に評価して、これを中世史研究に生かすべきことを主張していたからであった。

われわれはここで取り上げられた問題の著書を見ることができないが、同じ1928年にドイツ語で発表された彼の一論文「中世国制史および経済史の論争問題」⁽³⁴⁾から、当時の彼の見解のおおよそのところはつかむことができる。この論文では、従来中世経済の基本組織をもっぱら賦役労働に基づく領主制に求めてきた古典的な荘園理論(Frohnhof-Theorie, вотчинная теория)や、中世経済の特徴を——近代の「貨幣経済」に対置された——「現物経済」の基本カテゴリーで説明してきたビュヒャー流の理論に対して、20世紀初頭から現れたペロウ、ドブシュらの新しい中世史研究の提起した諸論点を積極的に取り上げ、またロシアではヴィノグラードフに代表されるこうした古典的な中世経済像から袂別すべきであると主張している。こうした文脈のなかで、とくに、古代都市と中世都市の発展および「その多様な諸形態と諸特性」とを明快に描いたものとしてウェーバーの『都市論』と『古代農業事情』の意義にも言及している。さらに、ドブシュの「荘園資本主義」(《grundherrschaftlicher Kapitalismus》)という用語にも「一定の妥当性」があると語ったり、あるいは例えば古代末期のローマ帝国を「国家社会主義」とか、あるいはシーザーの見た古ゲルマン諸部族の状態を「一種の戦時共産主義」とかいった用語でその社会制度を特徴づけることができるというような主張を展開している。そして社会経済史学に偏った従来の発展段階論的諸概念の見直し、例えば「封建制」、「都市経済」、「資本主義」などの一般概念の見直しや諸概念の社会学的精緻化の必要性を述べて、

社会経済史研究と法制史のあるいは政治史的研究との結合、それによる歴史学の総合化を主張している⁽³⁵⁾。この文脈でまた、「具体的で個性的なるものを把握するために必要な、その論理的性格からいって、最終的にはユートピア的な[非実在的なという意味での——筆者]一般概念」として、ウェーバーの「理念型」概念の特徴についても言及している⁽³⁶⁾。ウェーバーの「理念型」概念を具体的な歴史学の分析方法にも生かして、中世社会の一般理論を構築しようとする彼の志向がこの論文からも窺うことができる。

こうした彼の総合的な中世史像構築への志向に、ウェーバーの『古代農業事情』が少なからざる援護を与えるものであったことは間違いないであろう。だが、ここで使われた法制史的な「封建制」概念、あるいは「国家社会主義」（これらの用語をウェーバーも『古代農業事情』のなかで使用している）や「戦時共産主義」と言った用語の古代・中世史への自由な適用が、著しくイデオロギー的であった当時の「ブルジョア歴史学批判」の雰囲気の中なかでは、政治的な「反ソヴェト的な」言辞だとしてやり玉に挙げられることもまた確実であった。

ウェーバーの「理念型」概念はそもそも、特定の文化的価値観から対象の特性をクリティカルに引き出す、その限りで主観的に構成された概念であって、その意味で「ユートピア的概念」だといわれるが、それはまた当時の史的唯物論の「普遍的な法則」概念への批判を強く意識して作られたものでもあったために（ペトルシェフスキーは「方法論的自然主義」という言葉で史的唯物論批判を含意させていた）、この時期にマルクス主義史学の確立を急いだボクロフスキー学派によって、ウェーバーの理論が現代の反マルクス主義的な「反動的理論」の代表として取り上げられたのである⁽³⁷⁾。しかし、われわれの観点からみれば、この討論会のなかで、コスミンスキー(1886-1959)と若いネウスィーヒン(1898-1969)の二人だけがペトルシェフスキーを擁護する発言を行なったことが注目を引く⁽³⁸⁾。ちなみに彼らはともに、みずからの学問の方法論として史的唯物論の立場にたつことを表明していたが、終生非党員であることを通し

た人たちであった。コスミンスキーは、その討論のなかで、「序文」よりも著作の本体である彼の具体的な歴史分析の部分に目を向けて、討論会の参加者に歴史家として資料に基づいて議論をするようよびかけた。彼はペトルシェフスキーの古ゲルマン時代の原始経済の理解、「封建制」の概念、そしてドブシュを継承した「荘園資本主義」の概念を取り上げて、ペトルシェフスキーの方法論とそれらの概念が「非マルクス主義的である」ことは確かだが、彼の著書全体は決して「反マルクス主義的ではない」という形で主報告に反論した。そして会場の雰囲気には抗して、コスミンスキーは「本書はわれわれが共有できないような、マルクス主義とまったく無縁な観点から書かれたものではない。この本は膨大な資料、膨大な新事実、そしてこれまで歴史学にもたらされた多くの新しい研究を取り入れて出来上がった本である。そこには中世史学のあらゆる基本的諸概念が練り上げられており、しかもそれは非常に簡単にマルクス主義の用語への翻訳を可能にする観点からなされているのだ」と締めくくった⁽³⁹⁾。コスミンスキーの発言からは、あくまで実証的な資料研究を重視する彼の姿勢がよく窺えるように思うが、また、既に当時一定の年齢に達していたこともあってか（彼は31歳で1917年の革命を迎えていた）、彼の発言は全体として冷静で抑制の効いたもの——と、われわれには感じられるのだが——であった⁽⁴⁰⁾。同時にここでは、彼はこの場でウェーバーの名前をまったく口にしていないということにも留意しておきたい。

もう一人の擁護者、ニュースィーヒンはコスミンスキーより一回り若く（彼はこの時30歳前、革命時は19歳）、また当時アスピラントであり、РАНИОНの歴史研究所でペトルシェフスキーから直々に中世史の薫陶を受けた愛弟子であった。彼はやや感情的になって、満場のペトルシェフスキー非難の調子に抗議して次のように述べた。「この場でリッケルトが問題になるとときには、彼と結びつくものはすべてまるで悪魔のごときものとして扱われる。他方マルクスに由来するものなら、そのことだけですべてよしと言われる。それがよいものだからではなく、マルクスに由来するからだというわけだ⁽⁴¹⁾」と。そして、それに

続けて、われわれがいやしくも歴史家であるならば、たとえそれがマルクスのものであっても『ドイツ・イデオロギー』のなかにはなく、タキトゥスのなかに、「ゲルマン諸部族に共同体が存在したかどうかという問題に関する資料を探すであろう」と述べた。歴史学における実証的精神の追究というコスミンスキーの発言の趣旨と本質的には同じことを言おうとしているのだが、しかしネウシーヒンのこうした皮肉っぽい発言——しかし発言の内容そのものは学問的な姿勢からすればまことに真つ当なことなのであったが——は、会場を支配した雰囲気なかでは、「戦闘的唯物論者たち」——と批判者たちは自称していた——の怒りを増幅する結果しかもたらさなかった。「マルクス主義でないものは科学的ではない」というのがこの討論会を支配した雰囲気であり、その到達した結論だったからである。この討論会以後、ネウシーヒンは、コスミンスキーとは異なって、長い不遇の時期を過ごさねばならなかった⁽⁴²⁾。

ネウシーヒンもまたペトルシェフスキーの著作は「非マルクス主義的」ではあるが、「反マルクス主義」ではないといって自分の師を擁護したが、この討論のなかでコスミンスキーとは違って、ウェーバーの「理想型」についても言及した。それは既に彼なりの一定のウェーバー研究をその背後にもっていたからであった。彼がウェーバーの「理想型」概念について述べたことは、それはたしかに「非マルクス主義的概念」ではあるが、史的唯物論の「法則」概念に取って代わるものではなく、あくまで具体的な歴史分析をすすめていく上での「歴史認識の道具」であるにすぎない(つまり「反マルクス主義」ではない)ということであった。しかし、さらにそのうえで彼は、ウェーバーの諸概念はマルクス主義のタームで言う「土台」と「上部構造」との「相互作用」の理解を精緻化するのに有用なものであって、いわばマルクス主義の歴史学的方法論を補完する役割を果たすものだ、と述べた⁽⁴³⁾。これがソヴェトのマルクス主義史学の確立期の中世史家、ネウシーヒンのペトルシェフスキー擁護論であり同時にウェーバー論の基調でもあった。以下ネウシーヒンのウェーバー論に立ち入って検討してみよう。

(3) A・И・ネウスイーヒンのウェーバー研究

アレクサンドル・ヨーシフォヴィチ・ネウスイーヒン(Александр Иосифович Неусыхин, 1898-1969)は10月革命後に中世史研究の道に入った世代であり、1921年にモスクワ大学歴史哲学部を卒業してからРАНИОН 歴史研究所の大学院生として、ペトルシェフスキーの指導のもとで学んだ直弟子であった。彼自身はその師とは異なり、史的唯物論の見地に立つことを表明したが(あるいはこの世代の研究者としては、それ以外に道はなかったのかもしれないが)、しかし師への学問的尊敬の態度を曲げなかったために、1928年のペトルシェフスキー批判以後——「戦時の相対的に自由な」一時期を除いて——研究成果の発表を許されず、基本的には1950年代の末まで、「ペトルシェフスキー学派の惨めな代表者」というレッテルを貼られつづけた学者であった⁽⁴⁴⁾。^{補注(2)}

彼の専門は1929年の修士論文「古ゲルマンの社会体制」、1946年の博士論文「古ゲルマンの諸部族法典における所有と自由」という表題からも窺えるように、古ゲルマンの共同体の研究とドイツ封建農民の成立過程の研究であった。主著として——久しく発表の機会が得られなかったが——『6世紀—8世紀西ヨーロッパにおける初期中世社会の階級としての隷属農民の発生』(1956年)(《Возникновение зависимого крестьянства как класса раннефеодального общества в западной Европе VI—VIII вв.》 М., 1956.)と『8世紀—12世紀のドイツにおける自由農民の運命』(1964年)(《Судьба свободного крестьянства в Германии в VIII—XII вв.》 М., 1964.)という著書がある。ネウスイーヒンは、ドイツの、時代としては8世紀—11世紀の封建社会成立期を研究対象としていたが、ゲルマン諸部族の法典の資料研究を基にして、ゲルマン共同体の富裕な上層と大封建領主との中間に位置する「小世襲領地」の広範な存在に注目したことで知られている⁽⁴⁵⁾。これはコスミンスキーが13世紀のイギリス農村の研究で、教会領や大荘園の外に広範に存在した小領主経営に着目してイギリス中世史研究に画期的な成果をもたらしたと照応するものがある(コスミン

キーの場合は封建制の発達した段階におけるそれであったが)。我が国でもかつて、マルクスの共同体論への関心からソヴェト中世史学におけるドイツ初期封建社会の代表的な研究として彼のいくつかの論文が翻訳紹介されたこともある⁽⁴⁶⁾。

彼は1920年代に、そのいわば学問的修練の時代に、ビュヒャー、ゾムバルト、シュペングラーを始めとする当時の西欧の歴史学の所産をソヴェト・ロシアの学界に紹介するいくつかの書評を書いたが、そのなかの一人にウェーバーが入っていたわけである⁽⁴⁷⁾。明らかに彼は歴史学の方法論という問題関心からウェーバーの社会学に接近した。彼がウェーバーについて正面から取り上げた論文として、われわれは①「マックス・ウェーバーの都市の社会学的研究」(1923)、②「体系的経済史構築の新たな試み」(1924)、③「マックス・ウェーバーの『経験社会学』と歴史学の論理」(1927)の三本の論文を知っている⁽⁴⁸⁾。[以下これらの論文から引用する時、それぞれの論文に番号を付しページ数のみを記す。ただし③の論文は当該雑誌の二つの号にまたがって掲載されたので、論文の番号とページ数との間に号数を入れることにする。]さらに1928年に刊行された最初の『ソヴェト大百科事典』(第一版)第9巻所収の「ウェーバー」の項目も彼の手になるものであった⁽⁴⁹⁾。前稿でも指摘したように⁽⁵⁰⁾、①と③の論文が最近ロシアで刊行されたウェーバー著作集にその付録として収録されたことに見られるように、彼のウェーバー研究は今日ではソヴェト時代の先駆的な研究であり、ロシアに「土着的な」ウェーバー研究であったとみなされている⁽⁵¹⁾。

まずネウスイーヒンが対象として取り上げた素材の面から言えば、①の論文では『経済と社会』所収の『都市論』であり、②では『一般経済史』であり、③では『宗教社会学論集』の「世界宗教の経済倫理」の「序言」「序論」「中間考察」と「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、並びに『経済と社会』の『都市論』が扱われている。その他にも随所で『学問論集』の「客観性」論文や「文化科学の論理学の領域における批判的研究」からも多くの引用がなされている。『都市論』や『一般経済史』など古代・中世史関連のものが

主要な対象となっていることから見て、ネウスイーヒンのウェーバーへの関心がペトルシェフスキーの影響の下で育まれたことは疑いのない所であるが、『宗教社会学論集』や『学問論集』『経済と社会』にも深く立ち入っており（また『経済と社会』の「理解社会学」の方法とその諸カテゴリーにも言及している）、ペトルシェフスキーと比べても視野が大きく拡大していることは明らかである。それだけではなく分析それ自体も格段に綿密なものとなっている。しかし、それと同時にウェーバー解釈の点で、ネウスイーヒンの研究はペトルシェフスキーのそれとは大きく異なっているところがあることも指摘しておかなければならない。それはリッケルトとウェーバーとの関係、それと密接にかかわるウェーバーとマルクスとの関連をどう捉えるかという問題に関わる。この点を意識しながらネウスイーヒンの議論を追ってみよう。この主張は三論文を通じて変わらないが、分量も多くまとまった議論を展開しているのは③の論文である。したがってわれわれもこの論文を中心にみていくことにする。

ペトルシェフスキーの場合は、ウェーバーがヴィンデルバント、リッケルトらの新カント主義の「文化科学」と「自然科学」との二分化の方法論を、その具体的な歴史研究において基本的には継承発展させたものと見る傾向が強かったのに対して、ネウスイーヒンの場合は、ウェーバーが新カント派の認識論哲学のなかで育ってきたことは間違いないとしても、歴史事象を扱う具体的な分析に進む段になると、ウェーバーの方法がリッケルトから「切れる」ところがあること、しかもその際このリッケルトからの離反を促したのが実はマルクスの史的唯物論であったこと、この二つの点を強調する。ここにネウスイーヒンのウェーバー論の最大の特徴があるといつてよい。例えば彼は次のように述べている。「リッケルトの論理学がウェーバーの純論理学的研究にとって基本的な導きの糸となったこと、またその影響を示す響きがときには彼の具体的歴史研究の中でも聞こえてくる。しかし、ウェーバーが多様な諸現象、ときには遠くかけ離れた諸現象や社会生活の諸側面の間の諸関連を確定しようとする方向に進めば進むほど、また彼の歴史学的-社会学的研究の範囲が広がれば広がる

ほど、リッケルトの論理学という導きの糸はますます撚りあげられて細くなり、歴史家ウェーバーの研究の道は複雑で曲がりくねったカーブをたどることになった。実際に彼はますますリッケルトから離れていった。そして彼の壮大な歴史社会学的な総括的諸論文では、リッケルトおよび新カント派全体とは対立するまったく別の哲学思想の影響が感じられる。それは史的唯物論（精確に言えば、その創始者マルクス）の影響であった。」(③ № 9, 114)

ネウスイーヒンが「歴史社会学的な総括論文」といって取り上げたのは『プロ倫』と『都市論』であった。彼はその基本的な内容を相当詳しく——われわれの目からみても——かなり精確に紹介した後で、方法論の問題に立ち入り、リッケルトとウェーバー、ウェーバーとマルクスの関係について自らの見解を述べる。問題の中心は言うまでもなくウェーバーの「理念型」の理解にある。ただその場合、留意しておかなければならない点は、ネウスイーヒンはウェーバーの「理念型」論をその認識論レヴェルないし抽象的な論理学レヴェルにおいてではなく⁽⁵²⁾——この側面ではウェーバーがマルクスとは異質であることはネウスイーヒンにおいても自明のことであったが——、彼の表現で言えば、「歴史的-社会学的分析の方法」として押さえている、ということである⁽⁵³⁾。その意味をもう少し詳しく言えばこうである。例えば、プロテスタンティズムの宗教倫理と資本主義の精神との密接な関連を分析した『プロ倫』論文は、西ヨーロッパの近代資本主義の発生過程の「個性的な独自性」を見事に分析したものであるが——「個性的で独自な事象」を対象として分析するのがさしあたり歴史学の固有の課題であるとネウスイーヒンも考えている——、それにとどまらず、その分析にウェーバーが独自の「理念型」概念を使用したことによって、同時に経済倫理と宗教倫理との関連の「一般的な構造を解明する」もの（これをネウスイーヒンは当時の用語で「社会学」の課題であると考えている）にもなっているということである。ここでは、ネウスイーヒンによれば、「リッケルトによって個性的なるものと普遍的なるものとの間に打ち立てられたきびしい壁がウェーバーの手によって取り払われている」(③ № 9, 127)。さら

に「歴史的個性性」なるものの解釈においても、ウェーバーはリッケルトとは異なっているという。リッケルトは対象への認識主体の「価値関係」によって歴史認識に「本質的なもの」と「非本質的なもの」とを区別して、前者を出来事の「一回性」と「独自性」とを内容とする「絶対的歴史概念」と捉え、後者を「多様性のなかの統一性」を内容とする「相対的歴史概念」ととらえたが、ウェーバーの場合は「歴史的個性性」を「文化的意義の観点から概念上一つの全体として統一した歴史的現実の諸連関の複合体」と定義する⁽⁵⁴⁾。その場合彼が言うのはリッケルトのいう前者の概念ではなく、リッケルトが「集合概念」Kollektivbegriffと呼んだ後者の概念にあたるものである。ウェーバーの言う「歴史的個性性」とは決して出来事の「一回性」を本質的内容とするリッケルトのいう（「絶対的歴史概念」としての）「歴史的個性性」ではない。したがって、ネウスイーヒンによれば、ウェーバーの「理念型」Idealtyps概念は、歴史における「個性的なるもの」、「独自性」を把握しつつ、同時に「独自性のなかに繰り返して起こるもの、個性的なるものの中にある普遍的なるもの発見」をも課題とする「歴史認識の道具」なのである。〈Typus〉という表現には「繰り返して起こること」が、また〈Ideal〉という表現には「具体的には存在しないが、論理的に優位する特徴」という意味が含まれている、というのである(③ № 12, 126)。まさに「歴史分析の用具」としての「理念型」の概念は、ネウスイーヒンによれば、ウェーバーが「純粹理論の面では」リッケルトから出発しながらリッケルトから「離反」する、その局面を示すものであった。

このウェーバーのリッケルトからの「離反」という点に関連して、ウェーバーの理念型論についてもっとも早い時期にまとめた分析を行なったフォン・シェルティンク(Alexander von Schelting)の論文⁽⁵⁵⁾にネウスイーヒンがいち早く言及していることも興味深い事実である。ネウスイーヒンによれば、シェルティンクはウェーバーが「歴史的個性」の把握を課題として、まずはリッケルトの認識論の立場にたとうとしながら「理念型」論の概念形成にあたっては、その概念のなかに「普遍的な概念」、その意味では「繰り返して起こること」を

潜り込ませたという点で、ウェーバーは首尾一貫性に欠けていると批判している。だが、まさにシェルティンクの言うウェーバーの「矛盾」あるいはリッケルトから「外れるところ」、そこにこそウェーバーの理念型論の本領がある、というのがネウスイーヒンの強調したい点なのである。彼の目から見れば、逆にシェルティンクはリッケルトにウェーバーを丸ごと近づけてしまう誤りを犯しているということになる⁽⁵⁶⁾。

純論理的な記述から離れて具体的な歴史を対象とした社会学的な分析に移ると、ウェーバーはリッケルトから離れて今度はマルクスの史的唯物論に「接近する」というのが、彼の主張の今一つのポイントである。『プロ倫』（これは『都市論』⁽⁵⁷⁾と並んで、ネウスイーヒンによれば、ウェーバーの「歴史社会学的分析」の代表的な作品であるが）を読むと——と、続いてネウスイーヒンは言う——、「あまりその輪郭ははっきりしていないが、ウェーバーを目に見えない形で導いているある有名な思想家のシルエットが常にわれわれの知的な視線の前に浮き上がって見えてくる。それは紛れもなくマルクスのシルエットである」(③ № 12, 111.)。『プロ倫』の主題は西欧の近代資本主義のゲネシスの問題であり、近代資本主義の歴史的に独自の経済構造の問題であったが、これは明らかにマルクスに由来するものであるとネウスイーヒンは主張し始める。ただマルクスがその原蓄論で資本主義の客観的前提の問題を扱ったのに対して、ウェーバーはその主観的前提の問題、資本主義の「精神」の形成とその思想構造を解明しようとしたという違いはあるが、しかし一方ではウェーバー自身のみずからのアプローチが問題の一面だけを意識的に取り上げたものだけということを充分認識していたし⁽⁵⁸⁾、他方マルクスもまたプロテスタンティズムの宗教倫理が資本の発生に果たした役割について、『資本論』第1巻「商品の物神性とその秘密」の章をはじめ随所で触れているとして、ウェーバーの叙述に対応する諸論点をそれぞれ『資本論』の叙述から細かく拾い出している。更に、例えばウェーバーのいう「禁欲主義」に対応するのはマルクスでは「生産的消費」のカテゴリーであるとか、あるいはウェーバーのいうピューリタニズムの個人

主義の「超人格的性格」にはマルクスの社会的人間関係の「物象化」論が照応しているといった議論を展開して、ウェーバーのタームはマルクスのカテゴリーに充分翻訳可能なものであると主張する。このようにしてネウスイーヒンは、『プロ倫』の問題設定のみならず、一般に「経済と宗教との相関関係」を解明する上でも「マルクスとウェーバーとの類似には驚くべきものがある」というのである。

ネウスイーヒンはウェーバー社会学を積極的に規定して端的に「経験社会学」(эмпирическая социология)であると特徴づける。ウェーバーは「観念論者でも唯物論者でもない」、彼は「経験論者、しかも無意識的ではなく原理的な経験論者」である(③ № 12, 116)。「経験社会学」というこの規定は既に最初の①論文——都市論を対象としているものだが——のなかで与えられたものであるが、ネウスイーヒンによれば、ウェーバーの社会学は「社会発展の一般法則」の解明を意図した「抽象的な社会学」ではなく、また何らかの抽象的な哲学体系を創造しようとするものでもない(それは「形而上学」だ)。その特徴は「具体的な研究に基づいてそれぞれの歴史過程の具体的な進行についての表象を作り、さらに比較史的な方法でこのプロセスを他の諸現象との因果連関の形で叙述する」というところにある。それは「社会の発展過程を全体として一般的な諸概念で把握する」社会学と「社会発展の個々の側面の具体的な諸現象を把握する個別科学」としての歴史学との間の「媒介環」(ряд промежуточных звеньев)を提供するものに他ならない(① 247)。あるいは「通常の歴史学的方法と社会学的方法と呼ばれているものを一つの方法に融合したもの」(① 249)といってもよい。このウェーバーの方法は、一方では歴史の多様な諸現象の因果連関をただ一つの原理でもって一元的に説明しようとする「悪しき一元論」を、他方では諸現象を複数の原理からそれぞれバラバラに多様な「ファクター」や「原動力」でもって説明する「悪しき多元論」を、それぞれ排除して「歴史の多様な諸現象の相互作用」を解明しようというものである⁽⁵⁹⁾。ウェーバーの体系をこのような意味で「経験社会学」と特徴づけることによって、ウェーバ

一の「理想型」論を歴史認識の一般理論としてのマルクスの史的唯物論(ネウスイーヒンはマルクスの史的唯物論を実際の具体的な歴史学的分析の「方法」と混同してはいけないことを繰り返し語っている)に接合することができると考えたのである。

ウェーバーの「理想型」概念をもつばら歴史学の方法というレヴェルで捉え、また「宗教と経済との相関関係」の把握において両者が一致すると解釈する所にも見られるように、ウェーバーをマルクスに大きく引き付けて解釈するネウスイーヒンの議論は、予想される通り、ウェーバーは史的唯物論のタームで言えば「上部構造」の「土台」への「反作用」の側面を分析しているのだとする主張に行き着く。したがってウェーバーのもろもろの「理想型」は史的唯物論のタームに翻訳できるということにもなるわけである。だがそれだけではなく、ネウスイーヒンが史的唯物論のサイドに立つと言いつつ、歴史学の具体的な方法論としてウェーバーの「理想型」を積極的に評価する時、そこには史的唯物論に一定の限界を感じ取っているネウスイーヒンの姿が見え隠れしているように思う。もちろんこの場合の史的唯物論というのは当時のソヴェト歴史学で一般的であった理解を前提しているのだが、ネウスイーヒンの言う所によれば、史的唯物論は社会発展の一般法則に関わる理論であり、「理論としての原理的な仮説」を述べたものであって、自分もそれが正しいものと考えてるが、だからといってそれを歴史学者が個性的で多様な歴史的事象を実際に分析する場合に必要な歴史分析の「方法」と直ちに同一視することはできない。実際に具体的な歴史分析の過程では、マルクスの定式化した史的唯物論のカテゴリーよりもっと具体化されたカテゴリーを使用することが必要になるとネウスイーヒンはいう(③ № 12, 123)。ウェーバーの「理想型」の概念構成は、宗教社会学の例で言えば、「宗教と宗教倫理」「経済倫理」「生活態度」「経済的歴史的状況」の四層からなるとネウスイーヒンは理解するが、こうしたウェーバーの方法は、言ってみれば「土台」と「上部構造」との間に「多くの媒介環」(③ № 12, 123)を設定する意味を持つ。ウェーバーの「歴史社会学的方法」を、社会発展

の一般的理論と個性的な歴史分析とを「結合する試み」だとするニュースーヒンの議論は、結局ここに帰着するわけである。「ウェーバーがマルクスの定式の原理的意義を認めるか認めないかは、われわれにとってはたいした問題ではない。彼がそれを認めなければそれでよい。だが、だからといってこのことから直ちにマルクス主義はウェーバーがその歴史研究で行なった試み、マルクスの抽象概念やカテゴリーを具体化しようという試みをすべて拒否すべきだということにはならない。むしろ逆である。マルクス主義は、マルクスの学説の哲学的意義を全体として「神聖なもの」として維持しながら、こうした試みを認めるべきなのである。なぜならば、ウェーバーの試みは歴史的叙述の最大限の具体性と広範な社会学的一般化とをいかに結合させることができるか、またいかにしたら(少なくとも方法的には)一瞬たりとも図式主義に陥ることなく、イデオロギーのもっとも細やかな所をマテリアリスティックに分析できるのかを示した非常に教訓的な例だからである」(③ № 12, 123)。このように述べて、ニュースーヒンはマルクス主義の観点に立って歴史分析をする上でもウェーバーの理念型概念を——一定程度概念のモディファイを行なった上で——利用することができるというばかりか、むしろ積極的に利用すべきだとさえ主張するのである。

こうしたニュースーヒンの主張——彼の議論それ自体は今日のわれわれからみればそれほど目新しい議論ではないし、したがって取りたてて大騒ぎするほどのものではないともいえようが——には、当時のソヴェトの知的環境の中でのマルクス主義の教条主義化、図式主義化傾向に対する抵抗が秘められていることも推測するに難くないであろう。したがって、この点に関連して、ニュースーヒンはマルクス主義の「一般図式化傾向に対する解毒剤」をウェーバーに求めたのだというダヴィードフの評価はそれ自体としては基本的に当たっていると思う⁽⁶⁰⁾。

しかし、もちろんニュースーヒンは、両者の本質的な違いを忘れていないわけではない。第一に、現実の資本主義の形成以前に、資本主義の「精神」が宗教

的信仰から生み出されたという理解そのものはやはりマルクスの理解とは異なる。あるいは「宗教的イデオロギー」と「経済的諸関係」との因果連関の把握においては、ウェーバーの場合、「原因」と「結果」とが取り違えられている。第二に、ウェーバーのカテゴリー、たとえば資本主義の精神と宗教倫理との関連を示す時に用いられる概念、「親和性」Wahlverwandtschaft の概念はマルクスの「法則性」の概念とは異なる。事例としてこのような点をネウスイーヒンはあげているが、彼自身根本的な所でマルクスとウェーバーが対立することは十分に知っていた。しかしこの問題はわれわれが見ることのできる1920年代のネウスイーヒンのウェーバー論では明らかに後景に退いている⁽⁶¹⁾。

われわれがこれまで見てきたように、ウェーバーの歴史論の部分を切り取り、しかもウェーバーを大きくマルクスに引き寄せて解釈して⁽⁶²⁾、その「ウェーバー」によって「マルクス」を補完するというのがネウスイーヒンのウェーバー論の骨格であった。だがウェーバーとマルクスとの本質的な対立点というこの問題は、ひょっとしたら、論文「マックス・ウェーバーの『経験社会学』と歴史学の論理」(1927年9月、12月発表)で予告されたその第二部、すなわち「純論理的なレヴェル」でウェーバーの理念型論を扱う予定の章で、ネウスイーヒンは積極的に論じるつもりであったのかもしれない。第二部では理念型の論理構造、その理論的源泉、理念的考察と因果論的考察との理論的連関の問題を扱うことが予告されていたからである(③ № 12, 136-137)。あるいはそこでは、その問題に正面から触れることはやはり回避されたかもしれない。それはなんとも言えない事柄である。われわれにとって明らかな事実は、この第二部は第一部が書かれた直後1928年春に突如として襲った——とおそらくネウスイーヒンには思われていた——ペトルシェフスキー攻撃と「ブルジョア歴史学」迫害の嵐の結果、ついに書かれずじまいであった、ということである(多くの未発表の彼の草稿を収録している、先に触れた彼の遺稿集にもそれは見あたらないし、われわれの知る限りでは、この第二部に相当する草稿があったということは今日まで伝えられていない)。もとよりそれは外から強制された中断で

あったことも確かである。この事実はしっかりと書きとめておかなければならない。今日のロシアの真摯なウェーバー研究者ならば、これ以後半世紀にわたってロシアのウェーバー研究が中断を余儀なくされたことに——怒りと諦念とが入り交じった——無念の口上を押さえることはできないであろう。ロシアのウェーバー受容をたどり、ネウスイーヒンを読んできたわれわれもまた彼らの想いに共感を覚えないわけにはいかない。

しかしながら、もし仮にネウスイーヒンが第二部を書いて、そこでウェーバーとマルクスとの対立点の問題に取り組んだとすれば、果たしてそれはどんな内容のものになっただろうか。そんなことを考えてみるのもまったく無意味なことではないと思う。と言うのはこういう理由からである。すなわち歴史学の方法という側面に限定してウェーバーの理念型を理解し、そのことによってウェーバーを著しくマルクスに引き付けて解釈する方法、このネウスイーヒンの試みは「マルクス」と「ウェーバー」との「和解」を図ろうとする一つの試みであり（その意味でネウスイーヒンのウェーバー論は「マルクスとウェーバー」問題のソヴェト版であったともいえようか）、それはそれでウェーバーに対する紋切型の批判が横行した当時のソヴェト学界の中では大きな意味のある貴重な仕事であったと評価することができる。しかし実際のところ、認識論や社会科学方法論の論理レヴェルでは、ウェーバーとマルクスとの間に架橋しがたい大きな溝があることはおそらく誰も否定できない以上——とわれわれは考えるのであるが——、ネウスイーヒンはさらに大きな無理を冒さずして第一部の論旨と整合する形で（ということはすなわち、ウェーバーを過度にマルクスに引き付けた形で、ということであるが）ウェーバーの理念型論の論理的解明なるものを果たし得るのだろうか、こうした疑問がどうしても湧いてくるからである。だが、残念ながらわれわれの議論はこれより先に進むことができない。今ここでは、やはり第二部は書かれなかったという事実を確認しておくことにとどめるほかはない。

ネウスイーヒンのウェーバー研究は1920年代のソヴェト・ロシアの特殊な状

況のもとで、帝政期に育まれたそれなりに豊かなロシアの西洋古代史・中世史研究の学問的遺産のなかから生まれた一つ貴重なロシアのウェーバー研究であったと評価することができる⁽⁶³⁾。それは異様にイデオロギー化しつつあったソヴェトの学問世界の中で「ウェーバー」を救う一つの試みであったが、同時にそれによって「マルクス」を救う試みであったとも見ることができる。ネウスイーヒンはその当時「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のロシア語訳の出版を考えていたが⁽⁶⁴⁾、30年代以降の状況の中ではその現実性は皆無であった。だが、ウェーバーの主要な著作の翻訳計画は彼の弟子の一人で、ネウスイーヒンから『職業としての学問』の印象深い一節の引用を含むあの手紙を受け取った(注(48)参照) M・H・レーヴィナの手にしっかりと受け継がれた。しかしまた、それが日の目をみるにはなんと半世紀近い時間を要した。レーヴィナの手による訳書の刊行が始まったのはやっと1972年のことであったからである。しかしこの翻訳も当初は一部の専門家向けのものでその部数は限られており、一部の者しか読むことができなかつた⁽⁶⁵⁾。ロシアの一般読者がウェーバーのまとまった主要著作を読むには、またそれからさらに20年の月日を要したのであった。そしてその時はネウスイーヒンの論文第二部の発表をはばんだあのイデオロギーと体制とが崩壊したまさにその時と一致していたのである。今日のロシアのウェーバー研究の奔流に流れ込む潮流の一つは、ネウスイーヒンの時代とは内外の状況も大きく変わった1970年前後の時期に——この時期はまた国際的にも思想状況に一つの大きな転換が始まる時期でもあったことに留意する必要がある——、ネウスイーヒンのそれとは異なつた問題関心から、そしてまた学問分野からいえば、歴史学ではなく今度は哲学と理論社会学の分野から発している。したがって新しいウェーバー研究はネウスイーヒンが書こうとしてついに「書かれなかつた」あの第二部に相当する部分、哲学的、理論社会学的な諸問題にその対象を据えるところから再出発することになる。ロシアの学界の特殊性からいって、ウェーバーの人格と学問および彼の思想全体を対象とする、その意味でのウェーバー研究が本格的に始まるためには、そして

ウェーバーそのものに即した新研究が一定の成果を上げるためには、やはり一度は「マルクス」の呪縛から解き放たれることが必要だったのである。(未完)

注

- (1) Макс Вебер, *Город*, перев. Б.Н.Попова, под ред. Н.И.Кареева, Пг., 1923.
- (2) Макс Вебер, *История хозяйства, Очерк всеобщей социальной и экономической истории*, Издали по оставленным лекциям С.Гельман, профессор истории в Мюнхенском университете и М.Палий, доцент Высшей Коммерческой Школы в Берлине. Перевод под ред. проф. И.М. Гревса, Пг., 1923.
- (3) Макс Вебер, *Аграрная история древнего мира*, перевод Е.С.Петрушевской, под ред. и с предисл. Д.М.Петрушевского, М., 1925.
- (4) 拙稿「マックス・ウェーバーとロシア(1)」(本誌第10巻3号所収)の第2章参照。
- (5) 但し翻訳書にはどちらを底本にしたかが記されていないのはっきりしたことは分からない。翻訳が4章編成になっている点から見ると、同じく4章編成になっている *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 47, 1920/21. である可能性が高いように思う。
- (6) ちなみにウェーバーの著作の最初の英訳は『一般経済史』で、その出版は1927年のことであった。 *General Economic History*, translated by Frank H. Knight, London and New York, Allen & Unwin, 1927.
- (7) E・A・コスミンスキー『イギリス農業史とロシア学派』福富正実訳、未来社、1969年、8ページ。
- (8) N. Karéiev, *Les paysans et la question paysanne en France dans le dernier quart du XVIIIe siècle*, trad. du russe par C.W. Woynarowska, Paris, 1899.
- (9) 1879年4月のM・M・コヴァレフスキー宛てのマルクスの手紙及び1889年2月20日付K・カウツキー宛てのエンゲルスの手紙。『マルクス=エンゲルス全集』第34巻418-419ページおよび第37巻126-131ページ。
- (10) Н.И. Кареев, *Основы русской социологии*, СПб., 1996, Предисловие (И.Голосенко), с.5-26.

- (11) カレーエフの生涯と業績を詳しく紹介したものとして、В.П. Золотарев, Николай Иванович Кареев (1850-1931), *Новая и новейшая история*, 1992, № 4, с. 128-155. がある。またカレーエフがフランスの歴史学雑誌《*Revue historique*》の求めに応じて寄稿したロシア歴史学の50年を回顧した論文が最近になってロシア語に翻訳紹介された。Н.И. Кареев, Отчет о русской исторической науке за 50 лет (1876-1926), *Отечественная история*, 1994, № 2. この論文が《*Revue historique*》誌に発表されたのは1927年と1928年のことであった。なお最近になってロシア国内では、カレーエフを20世紀初頭のロシア社会学の創成期を担った一人として位置づける動きがある。А.Н. Медушевский, *История русской социологии*, М., 1993, с.163-171. さしずめ彼の分野は歴史社会学ということになるが、前注にあげた著作 Н.И. Кареев, *Основы русской социологии*, СПб., 1996. の刊行もそうした動向を示す一つの例である。
- (12) Н. Кареев, Предисловие редактора перевода, *Макс Вебер, Город*, с. 3-4.
- (13) ウェーバー『ロシア革命論 I』名古屋大学出版会、1997年、邦訳56ページ以下参照。
- (14) Jonathan E. Sanders, *The Union of Unions: Political, Economic, Civil and Human Rights Organizations in the 1905 Russian Revolution*, Columbia University Ph. D., 1985, Pt. 1, p. 581.
- (15) これより前に、1905年にパリで二巻本の『ドラホマーノフ政治論集』がストルーヴェとキスチャコーフスキーの手によって刊行されたことについては、前掲拙稿、172-173ページを参照。
- (16) М.П. Драгоманов, *Политическая сочинения, Т. I, Центр и окраины*, под ред. И.М. Гревса и Б.А. Кистяковского, М., Тип. т-во Д. Сытина, 1908.
- (17) 前掲拙稿、181ページ。Н.С. Плотников и М.А. Корелов, *Вопросы истории*, 1994, № 2, с. 76.
- (18) ウェーバー『ロシア革命論 I』名古屋大学出版会、1997年、原注(3)、邦訳188ページ。
- (19) 邦訳にルッチスキー『革命前夜のフランス農民』遠藤輝明訳、未来社、1957年がある。
- (20) John Barber, *Soviet Historians in Crisis, 1928-1932*, Macmillan Press, 1981, p. 14.

- (21) この本は1914年、1927年、1937年と4版を重ねた。本書は A. Savine (A. H. Савин, 1873-1923)——彼もまたイギリス農業史を専門とするロシア歴史学派の「第二世代」に属し、コスミンスキーの師の一人であった——の書評によって西欧の学界に紹介された。 *English History Review*, 1902, vol. 17, pp. 781-782. および *Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1903, Bd. 1 Heft 4, S. 583-592.
- (22) *Советская Историческая Энциклопедия*, Т.6, с.120-121.
- (23) Е. А. Косминский, Дмитрий Моисеевич Петрушевский, *Средние Века*, вып. 2, 1946, М., с. 6.
- (24) Е. А. Косминский, 前掲邦訳, 14ページ。ペトルシェフスキーについて我が国ではこれまで詳しい研究はほとんどないと思われるが、彼に関する邦語文献としては、先のコスミンスキーの邦訳論文の他に宮下孝吉氏による評伝がある。『社会経済史大系Ⅸ 社会経済史家評伝』弘文堂、1960年、157-164ページ。
- (25) *Средние Века*, вып. 2, 1946, с. 405-414. に彼の詳細な学術的な経歴が載っている。
- (26) М. Вебер, Социальные причины падения античной культуры, перев. Е. С. Петрушевской, под. ред. Д. М. Петрушевского, *Научное слово*, 1904, кн. 7, с. 108-124. これは Max Weber, *Die sozialen Gründe des Untergangs der antiken Kultur. Die Wahrheit*, 1896, Bd. 6, S. 57-77の翻訳である。
- (27) Д. М. Петрушевский, *Очерки из истории средневекового общества и государства*, М., 1907, 本書もまた版を重ねた。2-ое изд. 1908, 3-ое изд. 1913, 4-ое изд. 1917, 5-ое изд. 1922.
- (28) А. И. Данилов, Эволюция идейно-методологических взглядов Д. М. Петрушевского и некоторые вопросы историографии средних веков, *Средние века*, вып. 6, 1955, с. 306-307.
- (29) ペトルシェフスキーには「歴史学の論理的スタイルの問題に寄せて」(1915年) К вопросу о логическом стиле исторической науки (*Известия Петроградского политехнического института Петра Великого, Отдел наук экономических юридических*, 1915, Т. 24. 所収)と題する論文があり、これが前述した『中世の社会と国家の歴史概要』の第4版(1917年)、第5版(1922年)の序文に据えられた。なおこの論文は1911年に「ペテルブルク総合技術学校」の教授就任にあた

って行なった彼の講演がもとになっている。

- (30) А.И. Данилов, Эволюция идейно-методологических взглядов Д.М. Петрушевского и некоторые вопросы историографии средних веков, *Средние века*, вып.6, 1955, с.307-313. なおこの論文は1946年のペトルシェフスキーの追悼論集 *Средние века*, вып.2, 1946.における、コスミンスキー、ネウスイーヒンらによるペトルシェフスキー再評価に対する批判を意図して書かれたものである。
- (31) С.С. Неретина, История методологии истории, *Вопросы философии*, 1990, № 9, с.149.
- (32) その最初の批判論文が、П. Фридлянд, Два шага назад, *Под знаменем марксизма*, 1928, № 2, С.147-161.であった。ポクロフスキーによる非難は、М.Покровский, “Новые” течения в русской исторической литературе, *Историк-Марксист*, 1928, № 7, с.3-17. なお、John Barber, *op. cit.*, p.31 ff. も参照。
- (33) この討論会の発言記録は次の文献にみることができる。Диспут о книге Д.М. Петрушевского (О некоторых предрассудках и суевериях в исторической науке), *Историк-Марксист*, 1928, № 8, с. 79-128.
- (34) D.M. Petrushevski, Strittige Fragen der mittelalterlichen Verfassungs- und Wirtschaftsgeschichte, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 85(3), 1928, S. 468-490.
- (35) あるいはペトルシェフスキーはこんなことも言っている。概念の再検討によって中世社会像を再構成するならば、「近代は中世のもっとも本源的な有機的な連続なのであって、決してその否定、アンチテーゼではない」ということも明らかになるであろう、と。D.M. Petrushevski, a.a.O. S. 488.
- (36) D.M. Petrushevski, a.a.O. S. 488.
- (37) 主報告者の一人、フリードリャンドはウェーバーについて、彼はもともと「ドイツ自由主義の民族派」と強く結びついた知識人サークルの出身で、第一次大戦中は「ドイツのブルジョアのインテリゲンツィアの支柱」であり、また戦後は「ドイツのすべての愛国主義的思想家の華」であったと捉える。そして、ウェーバーの思想に見られるこの「民族的な大国主義的傾向」を、トレルチがその『歴史主義』(1922年)のなかで指摘した——世界大戦と革命とによる——「歴史哲学的思惟の危機」の叙述を援用して、20世紀のヨーロッパの「ブルジョア的な」「歴史意識の危機」の「反映」を示すものと位置づけている。Диспут о

- книге Д.М. Петрушевского, *Историк-Марксист*, 1928, № 8, с. 85-90. なお、先に紹介した1955年のА·И·ダニーロフのペトルシェフスキー論(前注(30))はその基本枠組みにおいてフリードリヤンドのこうした観点を継承したものであるように思われる。さらに、その他にもダニーロフには広く第一次大戦前後のドイツ歴史学を考察しながら、そのなかでも自由主義的な潮流の代表としてトレルチ、マイネッケとともにウェーバーを取り上げ、とくに戦時期のウェーバーの内政民主化論と戦争及び革命に対する彼の態度とを詳しく検討した論文がある。この論文は1958年に発表されたものであるが、ウェーバーの政治的時論を扱ったものとしてはおそらくロシアでは初めてのものではあるまいか。ウェーバーの政治論に立ち入って論じているもので別途検討を要する論文である。ここではただ、ウェーバーの「人民投票的ライヒ大統領制論」が「ドイツのファシズム独裁への道を掃き清める」結果を招いたとの指摘が見られることだけを言っておこう。А.И. Данилов, *Немецкие буржуазные историки «либерального направления» во время первой мировой войны и революции 1918-1919 годов, Новая и новейшая история*, 1958, № 5, с. 120. ダニーロフは1963年刊行の『ソヴェト歴史事典』第3巻に掲載されている「ウェーバー」の項目の執筆者であった。*Советская Историческая Энциклопедия*, Т. 3, М., 1963, с. 17.
- (38) なお、二人の他にその当時哲学の分野からペトルシェフスキーの著書を高く評価する一部の動きがあったことが最近になって紹介された。フッサール現象学の研究者であったГ.Г.Шпет(1879-1937)のペトルシェフスキー宛ての手紙がそれである。Г.Г.Шпет, Д.М. Петрушевскому, 16/IV-4/V 1928 г., *Вопросы истории естествознания и техники*, 1988, №. 3, с.120-128.
- (39) Диспут о книге Д.М. Петрушевского, *Историк-Марксист*, 1928, № 8, с.94-95.
- (40) なお、最近のコスミンスキー論の一つに、Е.В. Гутнова, Академик Евгений Алексеевич Косминский, *Новая и новейшая история*, 1992, № 2, с. 165-178. がある。
- (41) *Историк-Марксист*, 1928, № 8, с. 99.
- (42) コスミンスキーの方もその後の学問的境遇についていえば、やはり紆余曲折がなかったわけではないが、しかし、彼はこれ以前の1925-26年にイギリスで研究する機会を得て、1930年代には西欧の社会経済史学界に大きなインパクトを与え

る重要な研究論文を *Economic History Review* に発表して、国際的にも著名となり、1939年にはソ連邦科学アカデミーの通信会員、1946年には正会員に選ばれた。さらに1942年には——今日のロシアでは決して名誉なことと評価されないであろうが——スターリン賞を受賞するなどソヴェト歴史学界の頂点に立つに至った。コスミンスキーのイギリス農業史に関する二つの論文、*The Hundred Rolls of 1279-80 as a Sources for English Agrarian History*, *The Economic History Review*, III/1, January 1931, および、*Services and Money Rents in the Thirteenth Century*, *ibid.* V/2, April 1935. が、我が国でもかつて大塚久雄によって「イギリス荘園史研究史上における画期的なもの」として評価され、いわゆる大塚史学の近代資本主義成立史論の形成にも大きな刺激を与えたことはよく知られている。大塚久雄がコスミンスキー論文を紹介したのは1939年のことであった(大塚久雄「イギリス荘園の研究に関する最近の一傾向」東京大学『経済学論集』9の10、1939年、『増訂・近代資本主義の系譜』上巻、弘文堂、1951年、所収)。このコスミンスキーの研究が、「ロシア歴史学派」の第二世代の代表者の一人であるペトルシェフスキーから大きな影響を受けていることは、彼自身のペトルシェフスキー論からもある程度窺うことができるが(E. A. Kosminskiy, Дмитрий Моисеевич Петрушевский, *Средние века*, вып. 2, 1946, с. 5-11.), イギリス中世農業史の具体的な諸論点についていかなる影響を受けたかについては、われわれはまだ立ち入って言及するだけの用意がない。この問題については他日を期したいと思う。

なお、20年代ソヴェト・ロシアの西洋中世史研究と大塚久雄の研究とに関連して一言付け加えておけば、第一次大戦以降(そしてポリシェヴィキ革命以後も長期にわたって)西欧への自由な渡航が困難になったことが、原資料に基づく実証的な研究の点で優れていた「ロシア学派」の西欧中世史研究の伝統を受け継ぐ歴史家たち、ペトルシェフスキーはその「第二世代」、コスミンスキーはその「第三世代」の代表者の一人であるが、彼らをして理論研究や歴史学の方法論研究に向かわせたという事情があったかもしれない。それは同じく理論的色彩の濃い社会経済史学である大塚史学の理論形成が、同じように西欧への留学の道が閉ざされた第二次世界大戦の勃発という「不幸な偶然」という事情の下で始まったことと似ているように思う(大塚久雄自身の発言については、『大塚久雄著作集』第13巻、岩波書店、1986年、351ページ参照)。一方、ペトルシェフスキ

一の弟子でもあったコスミンスキーが1925—26年にイギリスに渡ることができて、*Hundred Rolls, Inquisitions post Mortem* といったイギリス中世農業史にとつての新しい原資料を使ってきわめて実証的な農業土地制度史研究を發展させることができたのは、この時期としてはおそらく例外的な事柄であつて、それは「幸運な偶然」であつたといえるのかもしれない。

- (43) *Историк-Марксист*, 1928, № 8, с. 124-125. またコスミンスキーもウェーバーの名前こそ口にはしなかったが、この点にかんしては、前述した彼の発言から窺えるように、この時期にはネウスイーヒンと同じような考えではなかつたかと想像される。
- (44) Л. Т. Мильская, Александр Иосифович Неусыхин. Тернистый путь ученого, *Новая и новейшая история*, 1992, № 3, с. 150. ミーリスカヤはネウスイーヒンの直弟子の中世史家である。
- (45) 福富正実「ソビエト中世史学における『小世襲領』論争」、国本哲男、福富正実訳『ゲルマン共同体の基本構造』有斐閣、1960年、所収、274ページ以下参照。
- (46) 国本哲男、福富正実訳『ゲルマン共同体の基本構造』にネウスイーヒンの3本の論文が収録されている。またほかに、林基訳「初期封建時代(6-9世紀)西ヨーロッパの農民層と農民運動」『専修人文論集』第21号、1978年所収がある。
- (47) 彼の全著作リストが А. И. Неусыхин, *Проблемы европейского феодализма*, М., 1974, с. 521-529にある。
- (48) ① А. И. Неусыхин, Социологическое исследование Макса Вебера о городе, *Под знаменем марксизма*, 1923, № 8-9, с. 219-250. ② А. И. Неусыхин, Новый опыт построения систематической истории хозяйства, *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса*, 1924, Т. 1, с. 425-435. ③ А. И. Неусыхин, «Эмпирическая социология» Макса Вебера и логика исторической науки, *Под знаменем марксизма*, 1927, № 9, с. 113-143, № 12, с. 111-137. ①と③は既に述べたように、1974年に刊行されたネウスイーヒンの遺稿論文集(А. И. Неусыхин, *Проблемы европейского феодализма*, М., 1974, с. 413-500.)に収録されて、彼のウェーバー研究がほぼ半世紀をへてソヴェトの歴史学界にも知られるようになった。なおこの論集には彼の博士論文「古ゲルマンの諸部族法典における所有と自由」がもとの形で収録されるとともに、彼のいくつかの私信が収録されている。その私信の一つに、彼の弟子であり、1970年代にウェーバーの主要著作のロシア語訳

にたずさわることになるM.H.レーヴィナに宛てた興味深い書簡がある。それは第二次大戦中のもので(1942年7月27日付)、彼自身が学問的に不遇であった時代の手紙であるが、そこでは学問に挫けそうになった弟子を励ますために、学問の何たるかを示したウェーバーの『職業としての学問』のなかの有名な一節が印象深い形で語られている。その一部を紹介しておこう。「…(歴史学のみならず)どんな分野でも、学問的創造にはある種の無私の精神が必要とされる。それは研究者の内面世界との関連を完全に絶つという意味ではなく、それを研究の客観的諸課題に部分的に従わせるという意味においてである。学問的創造はまた(他のどんな創造活動でも、またさらに観照や人との付き合いの場合でも同じであるが)全人格の投入を要求する。そして——彼がそれに従事しているあいだは——全人格を飲み込み、彼を全面的に支配する。したがってその時、精神の他の部分はそれとはまるで関係のない、何か付随的な働きをしているに過ぎない(だがそれはそう見えるだけである)。 (歴史家であり社会学者であった)ある学者が真の学問的創造のパトスを次のように規定したのも理由のないことではない。『このテキストのまさにこの個所の判読のために数百年のときが過ぎ去り、その判読の真実性が確証されるためにはなお数百年のときが過ぎ去るであろう。解読をしたのはわたしであるが、しかし事はこのわたしで終わるわけではない。わたしはこの学問の発展の客観的な必然性が通過する一点に過ぎないのだ。しかし、わたしは単なる「点」ではなく、生きた人間であり、[学問発展の——筆者]線が他ならぬわたしの所を通過したこと、しかもそれは私自身の努力によるものだ」と知ることはわたしの喜びである。たしかに、わたしの為したことは他の人でもできたかもしれないが、この場合それを為したのはこのわたしなのだ』/この厳しい考え方を誇張した言い方だとして拒否するとしても(わたしはそこには多少誇張があるのではないかとも思っているのだが)、それでもやはり真に学問的な創造には禁欲主義にまで達する自己犠牲の精神がなくてはならないということは認めなくてはならないだろう。…その同じ学者はまた次のようなことも語った。学問創造の独自性は学者のどんな作品もあるいはどんな発見も常に「乗り越えられる」事を欲するという点にある。なぜなら学問はとどまることなく前進するものだからである。したがってまじめな学者は皆、自分の仕事がこの達成のただ一段階になることだけを望むものなのであり、そし

- て彼の業績がその不可避的な(つまり客観的に必要な)一段階であったことが判れば、それで彼は嬉しく思うものなのである」。Там же, с. 518-519.
- (49) *Большая Советская Энциклопедия*, 1 изд., Т.9, М., 1928, с.129-131.
- (50) 拙稿「ウェーバーとロシア (1)」本誌第10巻3号、164-168ページ。
- (51) 例えばダヴィードフとガイデンコは1995年の著作のなかで、「綿密な分析、学問的文化的な視野の広さ、深く考え抜かれバランスの取れた結論という点で、ネウスイーヒンの研究はこれまでロシアでウェーバーについて書かれたものなかでは最良のものであったと思う」と書いている。Jurij N. Davydov, Piama P. Gaidenko, *Rußland und der Westen*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1995, S. 191.
- (52) 実は③論文「マックス・ウェーバーの『経験社会学』と歴史学の論理」(1927)は当初二部構成となることが予定され、第二部でウェーバーの認識論や論理的なレベルの議論(例えば「理解社会学」の諸カテゴリー、「親和性」、「客観的可能性」などのカテゴリー)を検討すると予告されていたが、この部分は結局発表されないままに終わった。ネウスイーヒン論文のこの第一部の発表を最後に、ロシアのウェーバー研究は長期にわたって途絶することになる。
- (53) 「ウェーバーの社会学がわれわれの関心を引くのは、新しい体系ないし新しい理論だからではなく、歴史現象をそれぞれ解明し解釈するために実際に適用される方法だからである。ウェーバーが他の社会学者と違うのは、まさに社会学の課題を追求するにあたって、彼の研究の結果がはるかに具体的な内容を含んでいるという点で、通常以上に大きく歴史学に近づいていることである」。А. И. Неусыхин, Социологическое исследование Макса Вебера о городе, *Под знаменем марксизма*, 1923, № 8-9, с.246.
- (54) Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd.1, S. 30. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムと資本主義の精神』、25ページ。
- (55) Alexander von Schelting, Die logische Theorie der historischen Kultur - wissenschaft von Max Weber und im besonderen sein Begriff des Idealtypus, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 1922, Bd. 49, Heft 3, S. 623-752. なお、この論文が基になって、Alexander von Schelting, *Max Webers Wissenschaftslehre, das logische Problem der historischen Kulturkenntnis, Die Grenzen der Soziologie des Wissens*, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1934. が刊行されたこと

はよく知られているが、ネウスイーヒンはこの書物に対する書評を残していた。これが最近になって公表された。おそらく1930年代半ばに書かれたものと推測されるが、当時彼のおかれた状況では発表の機会を得られず、彼のアルヒーフに残されたままになっていたものである。なおこの手稿には、シェルティンク批判と対照する形で、レーヴィト「ウェーバーとマルクス」(K. Löwith, Max Weber und Karl Marx, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 67, 1932.)への高い評価が見られる。 *Новая и новейшая история*, 1992, № 3, с.155-159.

- (56) А.И.Неусыхин, «Эмпирическая социология» Макса Вебера и логика исторической науки, *Под знаменем марксизма*, 1927, № 12, с. 126. および, *Новая и новейшая история*, 1992, № 3, с.158-159.
- (57) ネウスイーヒンはウェーバー『都市論』の固有の意義を理念的な方法と並んでとりわけ「比較史的方法」を採用しているところにあると捉え、これを「比較史的研究の見本である」と言っている。 *Под знаменем марксизма*, 1927, № 12, с.130.
- (58) この点について、ネウスイーヒンは、ウェーバーが『プロ倫』論文の末尾で述べた一節、すなわちこの論稿ではプロテスタンティズムの倫理が資本主義の成立に果たした「心理的動機」の面だけを取り上げたが、「プロテスタンティズムの禁欲それ自体が逆に、その生成過程においても、その特質についても社会的文化諸条件の総体、とりわけ経済的条件によって深く影響されているということも明らかにしていかなければならないだろう」(大塚訳、270-271ページ)という一節を引用した。したがってプロテスタンティズムの宗教倫理が資本主義の成立に果たした役割を述べたからといって、彼を「観念論者」だとはまだいえないと、——当時の支配的な考え方を意識して——ウェーバーを擁護する姿勢を見せている。
- (59) ネウスイーヒンは「悪しき一元論」の例として、中世都市の起源を一元的に説明する共同体起源論者や領主制起源論者がその仮説に不都合な諸事実を無視する態度、いわば「事実に暴力を加える」態度のことを挙げている。「悪しき多元論」の例としては、ドブシュとベロウの名前をあげている。ネウスイーヒンによれば、古代並びに中世都市の研究でドブシュはウェーバーが考察したのと同じ歴史発展の諸要素を考察し、都市発展に関する同じ諸理論(共同体説、荘園説、

市場説、ブルク説)に言及しているが、それを総括するに当たってドブシュはそのいずれにも「真理の芽がある」というにとどまっている、これに対してウェーバーはその「理念型」の概念によって古代並びに中世のそれぞれの都市の諸現象や特徴を描き出し、それらをまた「比較史的方法」によって対比整理することによって、都市論として一つの大きな全体図に纏め上げるのに成功した。А.И. Неусыхин, Социологическое исследование Макса Вебера о городе, *Под знаменем марксизма*, 1923, № 8-9. с. 247-248. 方法論の面では、ウェーバーと比べればドブシュ理論は問題にならないというのが彼の結論である。問題はマルクス主義についてであるが、彼はマルクス自身の方法を「悪しき一元論」の例に入れることはない。ネウスイーヒンの理解によれば、マルクスは「上部構造」の「土台」への「反作用」を決して否定してはいないし、またどの国の歴史も一律に歴史発展段階の法則に押し込めるような態度はとっていないと述べて、ここでは周知のマルクスの「祖国雑記編集部宛ての手紙」を引用している。Там же, с. 246, прим. 1.

(60) Jurij N. Davydov, Piama P. Gaidenko, a.a.O. S. 194. `

(61) ネウスイーヒンはウェーバーの「行為の諸類型」論あるいは「理解社会学」の方法についても触れていないわけではない。彼は第三論文の冒頭部分で「ウェーバーの最後の社会学研究(彼の死後出版された著作『経済と社会』の若干の章、特に導入部の抽象理論の部分)はかつての彼の方法論[ネウスイーヒンが言う所のウェーバーの「歴史社会学的方法」のことをさしている——筆者]とは相当異なる新しい手法で書かれている」ことにもきちんと目を向けている。しかし、そこではウェーバーが到達した「行為の社会学」は歴史的具体的内容を欠いた、「出来事的一般規則」《*generelle Regeln des Geschehens*》の確立に腐心する「普通の社会学」に近いものとなっていると彼は評価する。そして、この未完に終わった——と彼はみるのだが——「行為の社会学」の体系は「もしウェーバーの類いまれな歴史感覚がなかったとすれば、リッケルトの観点からはもとより、史的唯物論の観点からもまた、非難を受けても当然であっただろう」と述べて、ウェーバーとマルクスとの本質的な対立点のありかを示唆している。 *Под знаменем марксизма*, 1927, № 9, с. 115. 『経済と社会』の基礎におかれた行為の理論は彼の観点からすると明らかに方法論上は後退なのであ

った。しかしながら、『経済と社会』の方法についてはネウスイーヒンの議論はそこにとどまり、「ウェーバーが未完に終わった彼の著作『経済と社会』で打ち立てようとした社会学の分析は断念せざるを得ない」とのべて、本論に入っていく。そして、われわれがこれまで幾々紹介してきた——彼の歴史学的関心に引き寄せた——ウェーバーの「歴史社会学的方法」について論じたのである。

- (62) ネウスイーヒンはウェーバーを「歴史学の場面ではマルクスの直接の継承者である」とまで言っている。「科学一般とりわけマルクス主義に対するウェーバーの主要な貢献は、彼が社会構成体のさまざまな側面の相互作用の歴史分析を見事に行った見本を示した点にあり、また彼はこれを理論においてではなく、実践的に行なったという点にある。その際彼は土台に対する上部構造の反作用という学説を広範に利用したのである。この意味において彼は文字どおりではないとしてもその精神の面からいえば、歴史学の場面ではマルクスの直接の継承者なのである」。 *Под знаменем марксизма*, 1927, № 12, с.123-124. こうした言い回しの中に、ネウスイーヒンがおかしている「無理」を感じるのは、筆者だけではあるまい。
- (63) われわれは1920年代のロシアのウェーバー研究が西欧古代・中世史研究の分野から生まれたことを見てきたが、20年代前半にはもちろんそれ以外にウェーバー研究がまったくなかったわけではない。たとえば、ポリシェヴィキのもっとも有力な理論家でもあったブハーリンの著書『史的唯物論』（初版1921年、第2版1923年）にはウェーバーへの言及があちこちに見られる。ブハーリンはウェーバーを現代の「ブルジョア研究者」の中でも「最も優れた最近の宗教研究者」と呼んで、「世界宗教の経済倫理に関する彼の興味深い研究」（佐野勝隆、石川晃弘訳『史的唯物論』青木書店、1974年、222-223ページ）として、『儒教と道教』『ヒンズー教と仏教』を引用している（同書、196-197、217-219、222-223ページ）。「資本主義の精神」論文を「企業家の心理」について集中した研究であるとして、ゾムバルトとならべてではあるがウェーバーの名を挙げている。そして「ブルジョアジーのもっとも優れた学者」である彼らの議論は、『資本論』のなかでプロテスタントが「伝統的な休日をほとんど仕事日に変えたことによって資本の発生史の上で一つの役割を演じている」と指摘したマルクスの理論を展開させたものだと述べている（同書、274-275ページ）。なおこの論点はネウスイーヒンにおいても述べられており、ウェーバーをマルクスに包摂する議

論の一つに使われた。ブハーリンの著作からは彼がウェーバーの『宗教社会学論集』を相当読んでいたことが伺える。

さらにルナチャルスキーに、ウェーバーの音楽社会学を論じた一論文がある。

A. Луначарский, О социологическом методе в теории и истории музыки, *Печать и Революция*, 1925, кн.3, с.11-27.

少し変わったところでは、20年代後半にコミンテルンで議論された中国革命の戦略をめぐる問題との関連で、ウェーバーの『儒教と道教』がE.ヴァルガの論文に引用されたこともあった。E. Варга, Экономические проблемы революции в Китае, *Плановое хозяйство*, 1925, № 12, с.171, прим.1.

代表的なボリシェヴィキ理論家たちがこのようにウェーバーを論じているということは、1920年代のソヴェト・ロシアでは、ウェーバーが比較的によく知られた存在であったことを物語っている。

- (64) ネウシーヒンの妻に宛てた手紙の一つに(1929年6月14日付)次のような叙述がある。「今日ヤスパースのウェーバーについての講演を読み返して嬉しくなりました。この見事なウェーバーの特徴づけをロシア語に翻訳して、わたしの『プロテスタンティズムと倫理』の翻訳書につけるウェーバーに関する序文の代わりにおいたらどうかという考えが浮かびました。」なお、これにつづけて、彼は次のようにのべる。「でも印刷されることはないでしょう。あまりにも『観念論的』ですからね。図書館で注文していた同じヤスパースの *Psychologie der Weltanschauungen* (1919) に今日眼を通しました。これはこれでまた彼の『精神病理学』同様に面白いものです。これは様々な哲学体系を資料にして、人間の精神世界に対する態度の基本的な諸類型を描こうとする試みです。すなわち、哲学的創作の心理学的な刺激要因を解明しようという試みなのです。これは世界観の心理学といったもので、いわば『現実世界感覚の哲学』(философия мироощущения)とも言うべきものです。この本は非常に生き生きとかつ鮮明に書かれています。わたしがどれほどこうしたことに興味を引かれたか想像してみてください。わたしもすべてのロシアの詩人たちを彼らの抱く現実世界感覚の観念から分析しようと目論んでいたからですが、ヤスパースは同じことを哲学に関して行なっているのです」(*Новая и новейшая история*, 1992, № 3, с.159-160.)。ここには、公表された学術論文の表面からは窺うことができない、ヤ

スペースに共鳴するニューズーヒンのもう一つの世界がみえる。なお、彼はリルケの愛読者であったことも付け加えておこう。

- (65) しかしながら、この翻訳書に対する関心は非常に高かったようで、現在モスクワのИНИОНに所蔵されているものは、いずれも手垢で表紙は黒ずんでいた。なお、この翻訳書をめぐる事情については、拙稿「マックス・ウェーバーとロシア(1)」本誌第10巻3号、162-164ページを参照。

補注 (1)

モスクワにある「ロシア連邦国家アルヒーフ」(ГАРФ)に、РАНИОН 歴史研究所の中世史セクションが行なった1923年3月以降の研究会記録が保存されている(ф.4655, оп.1, л.155)。その記録によると、研究会はほぼ月1回のペースで開催され、ペトルシェフスキーが主宰し、ニューズーヒンが書記を務めている。コスミンスキーも常連の参加者であった。ここで取り上げられているテーマを見ると、たとえば、ドブシュの著作やウェーバーの都市論への関心が非常に高かったことが伺われる。またコスミンスキーは23年3月16日に「13世紀イギリス農村」と題する報告を行ない、すでにこの時点で、「賦役システム」は「現物経済」の象徴ではなく、むしろ「貨幣経済」の浸透の結果であるという、後に有名になる彼の重要な論点を展開している。ペトルシェフスキーが指導者となった、この中世史セクションの研究会がソヴェト初期の西洋中世史学を創出したのである。

なお、当時ニューズーヒンのほかにも、ウェーバー都市論に言及したストックリツカヤ-テレシコヴィチの論文がある。В. Стоклицкая - Терешкович, Город с историко-социологической точки зрения, *Печать и Революция*, 1925, кн. 1, с.62-78, кн.2, с.109-118。彼女はドイツ中世都市史を専門とするが、ウェーバー理論への肉薄度という点では、この論文はニューズーヒンのそれに比べれば、二歩も三歩もゆずる所があることは、明らかである。

補注 (2)

なお今日では、その弟子達を中心にして——ソヴェト時代、学者として「茨の道」を歩んだ——、ニューズーヒンとその師ペトルシェフスキーとを、あらためてロシアの西洋中世史学の発展の中で正当に評価し、位置づけようとする動きがある。その例として、注(44)に挙げたミーリスカヤの論文のほかに、世界史研究所が刊行した記念論文集、Е.В. Гутнова, Л.Т. Мильская (отв. ред.),

*Традиции и новации в изучении западноевропейского феодализма; памяти Д.
М. Петрушевского и А.И. Неусыхина. М., 1995. がある。*